

講演 2.

社会問題としての飲酒 ～酒害体験を聞いた学生の反応～

表昭廣（札幌北断酒会長・元札幌連合断酒会長）

平成 17 年、北海道大学大学院分野別科目「社会の認識」講義担当の先生から、「当事者の体験談を話して欲しい」と依頼を受けました。目的は、酒害が特別な人の問題では無く、身近にあること、「酒害」の恐ろしさなどを学生に知ってもらうことでした。全日本断酒連盟の全国大会（平成 17 年、札幌開催）終了後、一般から寄せられる相談が増え、断酒の啓発活動の必要性を感じ、依頼を引き受けました。断酒会の使命である「広く社会に向かって酒害の恐ろしさを伝え、酒害者を一人でも多く出さないための酒害相談、酒害啓発活動を行い、過去に何も社会に貢献できなかった者が、社会に必要な人間になる」を思い出しました。

70～80 人の学生が、真剣に体験談を聞いてくれました。終了後の質疑応答では、①飲みだしたきっかけは？、②どのようにしたらアル症になるのか？、③どうして止められたのか、などの質問が多く、8 割を超えていました。①・②の質問には答えることができましたが、③は難解であり、返答に困りました。人によって異なるため、あくまでも個人として聞いてもらいました。「酒を止めなければならない」条件が重なり、酒と喧嘩しても勝てないことを学び、飲んだ時の悪行を素直に認め、反省できたからです。このような気持ちになれたのは、入院先の病院で「内観療法」を受けてからです。「お陰様で、ありがとうございます」の言葉を素直に話せるようになり、断酒に繋がりました。今日 1 日酒を飲まなかったことに感謝し、自分を褒めることが出来るようになりました。

「学生の声」の一部を紹介します。

- ・ 祖国には、断酒会のような自助組織が無いので、酔っ払いが朝から道端にいる（中国人留学生）
- ・ 親がアルコール依存症なので興味があった。アルコール依存症で、奥さんや子供を傷つけたことを反省し、立ち直っていることが分かった。依存症の支援は相手に教えるのではなく、体験談から気づいてもらうことが分かった。イネイブラーは飲酒の手助けになるが、イネイブラーがいなくなったら、孤独で死んでしまうかもしれないのが難しいと思った。
- ・ 晩酌からアルコール依存症になる話を聞き、「晩酌」の言葉が恐ろしい単語に聞こえた。酒とは何なのか分からなくなった。苦しむ前の楽しむ段階で酒を止めたいです。
- ・ 話を聞いてイライラした。「だから何？」という気持ちになった。私は何があっても家族にあたる人は最低だと思う。不幸自慢をされているようで不快だった。私の人生計画で、アルコール依存症になることは微塵も考えていないので、もし、「自分もそうなら」と考えると恐ろしいです。

以上抜粋して、お届けしました。批判的な感想もありましたが、素直に受け止め、酒の恐ろしさを、伝え続けていこうと痛感しました。年々、学生がアルコール依存症の病気を勉強していることに驚かされます。今後、学生の感想をしっかり集積し、今後に役立てていきたいと考えております。最後になりましたが、このような話す機会を与えられたことに、感謝致します。